

ひと言 コラム

本業タイル

瀬戸では10世紀後半に陶器づくりが、19世紀初頭から磁器づくりが始まったことから、陶器づくりを元々の仕事という意味で「本業」、磁器づくりを新しく始めた仕事という意味で「新製」と呼んでいます。「本業タイル」というのは、陶器製のタイルを指します。

幕末以降、外国人居留地の建物の建築などから、タイルの需要が高まり、それにいち早く対応したのが瀬戸でした。新技術を導入して新しいデザインのタイルを生産するようになり、それにより「本業タイル」が日本の近代量産タイル第一号と呼ばれるようになりました。



1000年以上の歴史を誇る せとものまち 陶都・瀬戸

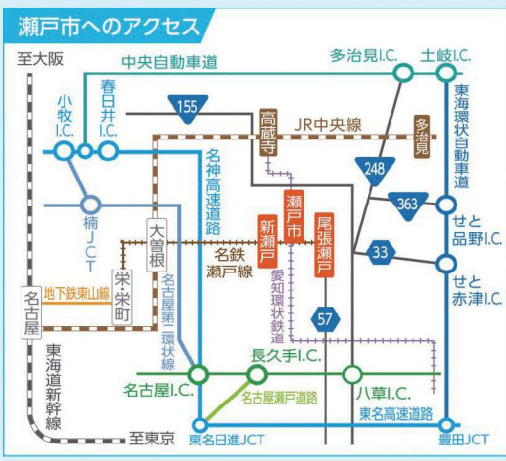
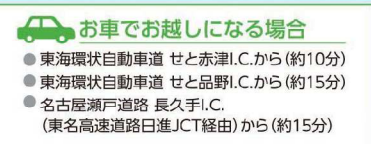
愛知県瀬戸市は、名古屋市の北東約20kmに位置し、周囲を標高100~300mの小高い山々に囲まれ、気候も温暖なまちです。

良質で豊富な陶土に恵まれ、瀬戸市で焼かれるやきものは、「せともの」というやきもの代名詞として日本のみならず、世界の人々に知られるようになりました。先人たちは新しい技術や文化を柔軟に取り入れ、「せとものまち」を発展させてきました。

先人たちより引き継がれてきた「歴史」「伝統」「文化」、そして豊かな「自然」が、今なお、瀬戸の暮らしに息づいています。



高蔵寺、岡崎方面からは愛知環状鉄道利用、瀬戸市駅下車、名鉄瀬戸線に乗り換えます。

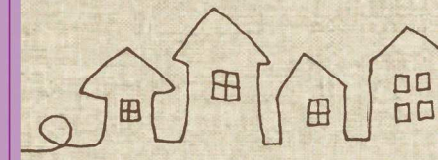
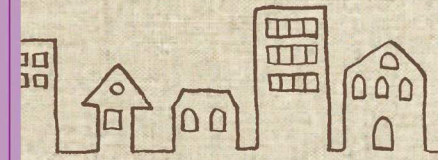
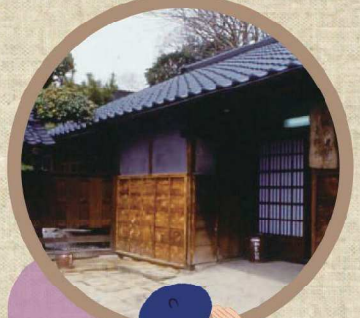
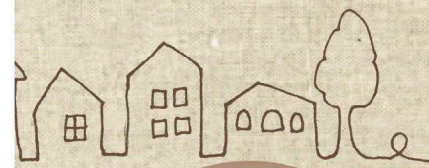
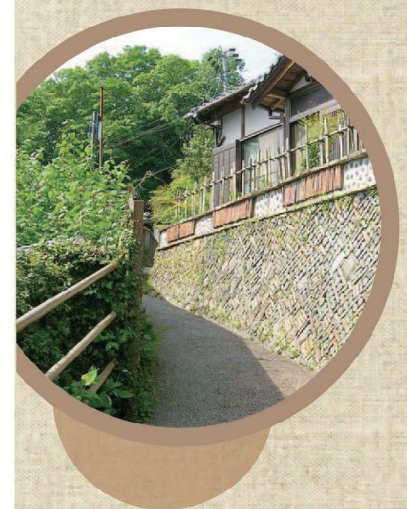


問い合わせ先

瀬戸市文化課
TEL:0561-84-1093 FAX:0561-85-0415
〒489-0884 愛知県瀬戸市市西茨町113-3
(瀬戸市文化センター内)



このガイドマップは、歴史文化基本構想を活用した観光拠点づくり事業(文化芸術振興費補助金)を受けて作成している文化庁です。



日本遺産のまち瀬戸市
瀬戸を知る
テーマ別ガイド④

ほろ かま がき 洞・窯垣の小径コース

洞ってどんなところ?

名鉄瀬戸線尾張瀬戸駅のある中心市街地から東におよそ1kmに位置する洞地区は、江戸時代には瀬戸村に属していました。19世紀以降、瀬戸村がやきもの生産の最盛期を迎える中、洞でも長大な連房式登窯が建ち並び、盛んに陶器生産が行われていました。

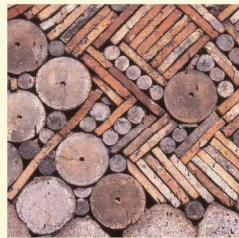
同じ頃、磁祖加藤民吉によって磁器の製法が伝えられると、瀬戸村の各地域では磁器製品を生産する窯屋の数が陶器生産を行う窯屋よりも多くなっていきますが、他の地域に比べ陶器づくりにこだわる気風があり、現在に至るまでその伝統が引き継がれています。そして、洞の随所でみられる窯垣は、やきものづくりに生きた洞の職人たちの息吹を感じさせてくれます。

まちなかに溢れる幾何学模様を探してみよう!

幾何学模様に出会えるまち

瀬戸には、まちなかの至るところにやきもので彩られた幾何学模様があります。その代表的なものが「窯垣」です。「窯垣の小径」でも様々な窯垣をみる事ができます。また、窯垣の小径以外にも市内には瀬戸川沿いを中心に約600か所の窯垣があります。

窯垣とは、登窯や石炭窯などでやきものを焼く時に使われたエンゴロや棚板、ツクといった大量の「窯道具」の廃材を、職人たちがやきものづくりの合間をみて、土圧に耐える頑丈な構造につくり上げた垣根、土留め、建物の基礎のことを指します。高いもので約4m弱、長いもので約30mもありますが、大小多様な形状の窯道具を組み合わせることで、セメント等の接着剤を使わずに積み上げられています。丸や四角、板状や筒状の多様な形をした窯道具を組み合わせ積んだ幾何学模様の窯垣。瀬戸のまちなかを散策しながらお気に入りの窯垣を見つけてみませんか。



宝泉寺本堂

1

宝泉寺

宝泉寺は今から約760年前の建長4(1252)年に壘水山神宮寺として創建されましたが、その後300年の来歴は不明で、慶長元(1596)年には火災により焼失したとされています。その後、寛永10(1633)年に、赤津の雲興寺15世興南和尚により、当地に曹洞宗の禅刹大昌山宝泉寺が開かれました。

本堂には本尊釈迦無尼如来、観音堂の1階には千手千眼観音菩薩像が祀っており、その2階は修行僧たちの修行の場である座禅堂になっています。毎年11月には「お薬師さん(あめんぼまつり)」が盛大に行われます。



山門

山門は全国でも珍しい上下二重構造の竜宮造りとなっています。階上部分は以前は鐘楼として使用されていました。



鐘楼

第二次世界大戦の折、金属不足により梵鐘が供出されましたが、その後、昭和27(1952)年に檀家の寄付により再建されました。「天女の図」が鐘楼の天井に描かれています。



首なし地蔵

山門を入るとすぐ左に、首のない地蔵があります。江戸時代、当時の役人が隠れキリシタンを探す目的で切り落としたのではないかともいわれています。



渡辺幸平の石碑

もともとは四国高松藩の下級武士だった渡辺幸平は、藩を出て京都にて鑄鋼型師となります。その後、瀬戸では陶祖公園にある陶祖碑の建立に尽力し、彫塑の技法を後進に指導するなど「陶彫の祖」と称されました。



陶質十六羅漢塑像(市指定文化財)

天保14(1843)年に加藤善右衛門(弘法善治)により制作されました。一般的には木製が多い中、この像は陶器でつくられ、袈裟衣には織部や黄瀬戸など、瀬戸ならではの釉薬が施されています。



天井絵

本堂の天井に、瀬戸の陶磁器の絵付職人によって描かれたとされる天井絵。慶長元(1596)年の火災の際の一部焼失し、再建時に再度つくられました。現在は新旧200枚の絵があります。



2 窯垣の小径

不要になった窯道具を積み上げてつくられた「窯垣」が続く、全長400mほどの細く曲がりくねった道。かつては窯業生産で栄えた洞地区のメインストリートであり、窯場で働く人々が陶磁器や燃料を担いで往來した汗の道でもありました。現在でも窯屋の邸宅が建ち並ぶほか、周辺には、窯元・ギャラリーがあり、せとものまのちの風情が楽しめます。毎年秋には「窯垣の小径まつり」が開催されます。

3 窯垣の小径ギャラリー

江戸時代に建てられた窯元の邸宅を利用したギャラリー。主に洞町で活動する若手作家の作品が展示されています。四季にあわせた企画展も開催され、洞の歴史が詰まった建物で昔の空気に包まれて、現代の作品を鑑賞できるスポットです。

開館時間 午前10時～午後4時
開館日 企画展開催時の土日祝のみ
入館料 無料



4 窯垣の小径資料館

陶磁器生産を行っていた窯元、旧寺田家の邸宅を平成7(1995)年に改修した建物群。敷地内には、母屋、倉庫、離れ(客間用)があり、母屋は明治2(1869)年には建てられたことが確認されており、その後倉庫が、大正時代には離れが建てられました。現在は内部に資料館や休憩所を備えており、中でも日本の近代量産タイル第一号といわれる「本業タイル」で装飾された浴室やトイレは必見です。

開館時間 午前10時～午後3時
休館日 毎週水曜日、年末年始 入館料 無料



5 白龍大明神

その昔、洞で「エンゴロ屋」をしていた人が病気になる、なかなか治らないため占師にみてもらったところ、「この地で亡くなった落武者のたたり」といわれました。その化身が白竜であることから石碑をつくり「白竜さん」としてお祀りしました。

昭和37(1962)年、古瀬戸小学校へと続く道の工事に伴い、今の場所に石垣を積んで山の神様、天神様と一緒に祀られました。現在では、白竜さんに卵を供えて子どもが授かるようにお参りする人もいます。



6 王子窯

窯場には、現在は使われていませんが非常に規模の大きい重油窯の姿を今も見ることができます。また、近代において洞のみならず瀬戸の風景を特徴づけた重油窯の煙突が今も残されており、かつて窯業生産で活況を呈した当時の姿を偲ぶことができます。その他、敷地内には明治33(1900)年に建築された「モロ」と呼ばれる工房や、陶房兼ギャラリーが高台にあり、そこから洞町の景色を眺めることができます。

ギャラリー営業時間 午前9時30分～午後4時 休業日 毎週日曜日



7 弥蔵観音・弥蔵弘法

弥蔵観音の由来は、天保2(1831)年、ある女性が「できもの」で苦しみ亡くなる際、「自分を祀ってくれたらきつと治す」と言い残し、観音像を祀ったことに始まります。その右側にある弥蔵弘法は、慶応3(1867)年に東洞町の男性が28歳で亡くなる際、遺言で「腹痛に苦しむ人を助けたい」と言ったことから、弥蔵観音と並び祀られました。元々、今の場所から300mほど東の地点にありましたが、昭和36(1961)年に現在の場所に移されました。



8 窯跡の杜

「窯跡の杜」には、かつて、江戸時代末期から戦後まで操業した連房式登窯が存在していました。平成25(2013)年の山開きに合わせて発掘調査が行われ、窯の位置や周辺の工房跡の状況などが明らかにされています。現在、それらの成果をもとに整備され、窯跡の位置や規模がわかるようにサインが置かれ、周辺には工房跡が存在したことを示す地形もみることができます。一つの杜の中で近世から近代に至る瀬戸窯業の盛況ぶりを感じることが出来る貴重な文化・産業遺産です。



9 洞本業窯(市指定文化財)

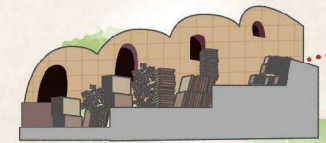
かつて窯跡の杜内の奥洞窯(東洞A窯跡)で操業した連房式登窯を、昭和24(1949)年に部分的に移築したものです。昭和54(1979)年までは、実際にこの窯で生産が行われていましたが、現在は使用されていません。しかしながら、瀬戸でこのように登窯本体が残されている例はほとんどなく、極めて貴重です。





モデルコース

所要時間: 2~3時間



洞本業窯



- 駐車場
- トイレ
- 主な窯垣
- 窯垣の小径